

選定理由 現存産地が県内に1箇所しかなく、棲息環境も限定的で、危機的状況にあると考えられる。

形態 本州・四国・九州に産する殻長20~25 mm程度のワスレガイ類にはシマワスレとベニワスレの2種があり、前者は殻の膨らみが弱くて楕面の窪みが浅いのに対し、後者は膨らみが強く楕面は深く窪む点で識別できる(吉良, 1950: (6)69–(7)70; 波部, 1952c: 24(106)–26(108); 黒田, 1956b: 7(99)–10(102))。吉良(1959: 146–147, pl. 57, figs 14–15)はシマワスレを *Sunetta concinna* Dunker, 1865 in 1858–1878: 74, no. 81, pl. 25, figs 4–6, as *S. (Meroë) concinna*, ベニワスレを *S. solanderii* (Gray, 1825: 137, as *Cytherea Solanderii*) とそれぞれ同定し、のちの版では後種の学名を *S. subquadrata* (Sowerby II, 1851a: 610–611, no. 6, pl. 126, fig. 9) に改めた。その後の波部(1977a: 272, pl. 56, fig. 5)や Kuroda & Habe(1981: 167)はシマワスレを *Cyclosunetta concinna*, ベニワスレを *Sunettina solanderii* とし、この扱いは近年の松隈(2017: 1249, pl. 544, fig. 9; pl. 545, fig. 1)まで続いていた。ところが Huber(2010: 394–395, text-figs; 727–728)は、吉良のいうシマワスレは *S. concinna* ではないとして新名 *S. (Sunemeröe) kirai* Huber, 2010 を与え、同時に *S. solanderii* と *S. subquadrata* を図示した。Huber の見解に従えば確かに *S. concinna* (インドネシア~フィリピンに分布する)は日本に産するどの種とも大きく異なり、そればかりか *S. solanderii* (パキスタン~インドにかけてのインド洋産)と *S. subquadrata* (北西オーストラリア産)もシマワスレとベニワスレのいずれにも合致しない。このためシマワスレは *S. kirai* と呼びうるとしても、ベニワスレは適切な学名をもたないことになるため、Fukuda *et al.*(2021: 110–117, figs 2–5)が新種 *S. (Sunemeröe) beni* として記載した。岡山県で見出されている個体は全てベニワスレであり、シマワスレの産出例はない。殻長約24 mm, 殻高約19 mm, 卵円形で厚く堅牢、不透明、強く膨らむ。殻頂はほぼ中央に位置して前傾し、ほとんど突出せず鈍い(シマワスレは尖って小さく突出する)。前背縁はやや窪む(シマワスレは窪まず直線的)。後背縁の楕面は長く、両殻間で深く幅広い溝状に窪み(シマワスレではごく浅い)、その中に短い靱帯が位置する。殻表は淡黄褐色の殻皮で覆われ、鈍い光沢があり、微細な成長脈以外は平滑で、白地に赤紫色の放射状色帯を多数走らせるが、ジグザグ模様を呈する個体もある。内面は白色で、套線は小さく彎入する。腹縁内側は細かく刻まれる。鉸歯は強い主歯と長く低い前側歯からなり、左殻の後主歯は長く低い。足は幅広い三角形で先端が尖り、白色。水管は先端が茶褐色に染まる(Fukuda *et al.*, 2021: 113, fig. 5 に生体写真あり)。写真： 備前[倉敷市]下津井, 畠田和一コレクション #1911 (パラタイプ), 福田撮影。殻長21.9 mm, 殻高18.0 mm。



分布 タイプ産地は「兵庫県淡路島洲本市中川原町厚浜」。太平洋側は房総半島以南、日本海側は福井県以南、奄美大島までと、韓国南東部(蔚山・釜山)、台湾、中国南部(浙江・福建・広東・海南各省)、ベトナムまで分布する(Fukuda *et al.*(2021: 115–116, fig. 28)。瀬戸内海でシマワスレを記録した畠山・矢野(1979: 10)、稲葉(1982: 60, no. 253, as *Cyclosunetta concinna*)、及び瀬尾・Tanangonan(2014: 112, no. 110, as *C. concinna*)は、いずれも本種を誤認したものと考えられる。

生息状況 ワスレガイ属の種は総じて外洋または湾口の清浄な砂底に産し、瀬戸内海においても同様に島嶼間など潮流の比較的速い場所の潮下帯に棲息する。日本に産するこの属の多くの種が強い減少傾向にあり、中でもベニワスレは過去に文献記録のある産地の大半で近年の棲息が確認できないことから、最も危機的な状況にあると考えられている(Fukuda *et al.*, 2021)。本種は岡山県では畠田和一コレクション中に「備前[倉敷市]下津井」産の2ロット(すべて合弁で3個体と1個体, #1911, #3995; 写真)が現存し、ともに「吉良哲明氏同定品 1950。」とラベルにある。その全個体が殻皮、光沢、色彩、靱帯とも良好な状態に保存されているため採集時は生貝であったと考えられ、恐らくは下津井漁港の漁層から得られたものであろう。それ以降岡山県では近年まで半片死殻や破片すらも見出された例がなく、他の海域と同様、高度経済成長期の水質汚染、海底浚渫などによる棲息環境の悪化とともに激減したと考えられる。しかし2017年12月と2018年12月の2度にわたり、吉松定昭氏によって玉野市日比沖の潮下帯から採集された、モミジガイ類の消化管中で生きた幼貝計16個体が見出され(OKCAB M29024–29025; Fukuda *et al.*, 2021: 114)、岡山県から絶滅していなかったことが判明した。近隣の香川県でも2014–2020年にかけて、高松・坂出両市沖の備讃瀬戸で複数の生貝が繰り返し確認されているため、この海域では今なお個体群が維持されていることが確実視される。本種が健在な場所は日本全体でももはやわずかしか残っておらず、岡山・香川両県の産地は極めて貴重である。ただし岡山県での確認例はまだ少数の幼貝にとどまり、新鮮な死殻も含めて成貝が見出されていないことを考えると、香川県の個体群から幼生が伝播してきてある程度までは成長するものの、成熟には至らず死滅してしまうのかもしれない。この場合は岡山県内に定着しているとは言い難く、複数年にわたる個体群維持が可能となるほど海底環境が回復していない可能性も否定できないので、再発見されたからといって決して安心できる状況にはない。今後も浅海底の環境が悪化すればこのまま絶滅する恐れも依然として払拭できないため、継続的な注視と環境改善への配慮が必要である。

(福田 宏)